

巻頭言

「超多収プロ」から生まれたもの

九州沖縄農業研究センター所長 岡本 正弘

環太平洋経済連携協定(TPP)交渉が続くなか、農業の国際競争力強化に向けて農作物の低コスト栽培や高付加価値化が強求められています。こうした中、農作物の低コスト栽培に直結する作物の多収性に大きな期待が集まっています。ここでは、イネを例にして多収性育種の歴史を振り返ってみます。

農研機構が、現在、特に期待を寄せる多収米に「あきだわら」という品種があります。2008年に農研機構作物研究所が開発しました。作物研究所によると栽培条件によっては10アール当たりの収量が700kgに達し、「コシヒカリ」に比べ約30%増収するそうです。新品種による増収程度は一般には高くても5%程度とされているので驚くべき数字です。

「あきだわら」の多収性は先祖をたどること三代前の「アケノホシ」という品種に由来します。「アケノホシ」は、「超多収プロジェクト」により1984年に農林水産省中国農業試験場(現 農研機構近畿中国四国農業研究センター)で開発されました。「超多収プロジェクト」とは、頭打ちであった当時の日本稲の収量を飛躍的に高めることを一つのねらいとして、1982年に農林水産省が立ち上げたプロジェクトです。外国稲のもつ多収性を積極的に日本稲に導入することによって、プロジェクト1期(3年間)で10%、2期(5年間)で30%、3期(7年間)で50%、収量を高めた他用途米を開発することが目標でした。「アケノホシ」は「超多収プロジェクト」の最初の成果として注目されましたが、食味が劣ったため普及には至りませんでした。

「アケノホシ」はその後、各地の試験場で多収性の育種母本として利用されました。このうち、愛知県総合農業試験場山間技術実験農場を経て農林水産省農業研究センター(現農研機構作物研究所)で改良された品種の後代から、多収でおいしさも兼ね備えた「あきだわ

ら」が開発されたのです。「アケノホシ」が生まれてから実に24年後のことでした。

振り返ってみると、「超多収プロジェクト」が立ち上がった1980年代は、品種に対する現場ニーズが量から質へと大きく切り替わった時期でした。「あきたこまち」(1984年)、「ヒノヒカリ」(1989年)、「ひとめぼれ」(1991年)等、我が国を代表する良食味品種が各地で競うように開発されました。一方、多収性を前面に掲げた「超多収プロジェクト」は1989年に見直され、米の需要拡大に軸足を置く「新形質米プロジェクト」へと移行しました。こうして、多収性育種はしばらく、国のプロジェクト研究の表舞台から姿を消すことになります。

「超多収プロジェクト」そのものは終了したものの、多収性育種は日本各地で継続されました。「タカナリ」「ふくひびき」「タチアオバ」「北陸193号」「きたあおば」「モミロマン」「ミズホチカラ」等、数々の多収性品種が開発され、自給率向上を担う飼料用や米粉用品種として全国各地で栽培されています。

仮に、「超多収プロジェクト」がなかったとしたら…、政策ニーズに応えるこれらの多収性品種をタイムリーに開発することはできなかったでしょう。米余りの時代に、敢えてこのプロジェクトを立ち上げた関係者各位の先見性に驚かされます。

一方で、プロジェクト終了後も、多収性という不断の育種目標に向かって挑み続けた育種家たちの努力と創意・工夫を忘れることはできません。

